

言語処理の発達からみたダケとシカの習得過程

峯 布由紀
東洋学園大学

要 旨

とりたて詞のダケとシカは、肯定・否定と異なる構文をとりながらも似たような意味を表す。そのため、日本語学習者にとって、この二形式の使い分けは習得困難なものとなっている。

本研究では、このようなダケとシカの習得過程を明らかにすべく、初級から超級学習者計 429 名の発話データを分析した。その結果、以下のような傾向が見られた。①ダケは初級から使用される。それに遅れて、②シカは中級から使用される。③ダケでとりたてられているものを見てみると、初級から超級へと日本語能力が上がるにしたがい、1 語のみから、句、節と、大きな言語単位のものを取りたてるダケの使用が見られるようになる。

さらに、本研究では、これらの結果を Processability Theory (Pienemann 1998) の枠組みで説明し、接続辞の習得を調べた (峯 2007) の結果と照らし合わせて、日本語全体の発達段階について検討した。

1. はじめに

とりたて詞のダケとシカは、次の (1) にあるように、肯定・否定と異なる構文をとりながらも同じように限定の意味を表す⁽¹⁾。そのため、日本語学習者にとってはこの二形式の使い分けの習得が難しく、次の (2) のように、シカを使うべきところでダケを使ってしまう誤用がしばしば見られるということが先行研究でも指摘されている (市川 1997、野田 2007 等)。

(1) 太郎だけ来た。 / 太郎しか来なかった。

(2) ??日本語は半年だけ勉強しましたから、まだ下手です。

(正：日本語は半年しか勉強していませんから、まだ下手です。)

そして、(2)のようにシカを使うべきところでダケを使用する誤用が多いことから、このタイプの誤用の要因はシカの習得がダケに後れることにあると思われる。しかしながら、次に挙げる点を考えれば、シカの習得がダケに後れてしまうことはごく自然なことのようにも思われる。

- ① 教授順序：多くの日本語の教科書の文型の配列からもわかるように、通常、シカよりもダケのほうが先に教えられている（付録1参照）。
- ② インプット頻度：話し言葉も書き言葉も、日本語母語話者は、シカに比べて、ダケの使用頻度が高い（中西 2010）。
- ③ One to One Principle (Anderson 1984)：第二言語の習得過程には、形式と意味・機能を一対一でマッピングさせながらことばを習得していく傾向が見られる。そのため、一つの意味・機能に複数の形式が用いられる場合、そのうちの一形式のみを使用して、他形式の使用が後れる傾向にある。つまり、ダケが先に使用されれば、意味・機能の重なるシカの使用が後れることを意味する。これは、使い分けが難しいということもあろうが、シカを使わなくともダケで意味の伝達ができるため、シカの使用の必要性が低くなってしまいうということも関係していると推察される。
- ④ シカ構文の複雑さ：シカは冒頭で述べたとおり、否定構文をとるため、文構造がダケに比べ複雑である。

以上、シカの習得が後れる要因を挙げることはそう難しくない。しかし、一見、容易に習得されているように見えるダケについても、学習者の使用するダケは、母語話者のそれとは異なる。日本語学習者と母語話者の書き言葉と話し言葉のコーパスを分析した中西（2010）によると、学習者の使用するダケは名詞をとりたてたものが多いのに対し、母語話者は動詞をとりたてたものが多いという。

ダケとシカを一緒に教えればその違いがわかりやすく、誤用は避けられるようにも思われる。しかし、似たような意味の言葉を一緒に教えるのは

学習者を混乱させ、記憶への定着を阻害してしまうため効果的ではない (Nation 2000 参照)。したがって、多くの初級教科書がそうしているように、ダケとシカは別々に教え、誤用についても発達過程に見られる現象として扱うべきであろう。

学習者の日本語は流動的で変化していく。学習者は、さまざまなインプットをもとに、各表現の知識を徐々に深めていく。そのため、先行研究で既に報告されているダケとシカの誤用傾向や、母語話者とは異なる学習者のダケの使用傾向も、学習者の日本語のレベルによって異なってくると推察される。そのため、学習者のレベルに応じた適切な指導やインプットを模索するためには、まず、学習者の日本語が初級から超級へと発達していく過程で、ダケとシカの使用がどのように発達していくのかをとらえ、さらに、この二形式の発達過程を、他の言語項目も含めた言語発達の全体像の中に位置づけることが必要であろう。

そこで、本研究では、次の二つを研究課題とする。

- ①. 初級から超級へと日本語が発達していくにつれて、学習者のダケとシカの使用がどのように推移していくのか、その過程をとらえる。
- ②. ①の結果を他の言語項目の習得研究の結果 (峯 2007) と照らし合わせ、全体的にみた日本語の発達の過程に位置づける。

本研究では、②を行うにあたり、理論的枠組みとして **Processability Theory** (Pienemann 1998) で示される第二言語の発達段階を援用する。以下、次の2節で、**Processability Theory** の概要と、それを日本語の習得研究に援用した峯 (2007) の研究を紹介し、3節ではダケとシカのそれぞれの構文的特徴をとらえる。続く4節で研究方法を説明し、5節で分析結果をもとに考察を行う。最後に6節でまとめと今後の課題について述べる。

2. Processability Theory の概要と、日本語習得研究へのその応用

2.1 Processability Theory の概要

Processability Theory (Pienemann 1998, 2011) とは、発話モデル (Levelt 1989) と言語処理の自動化という観点から言語の発達を説明する理論である。

Levelt (1989) の提唱する発話モデルによると、人が話をする際、通常、母語であれば、意識が向かうのは話す内容の方である。言語の統語的な処理は自動的に瞬時に行われる。どのように説明したらよいか、何をどのような順番で話せばよいかと考えながら話すことはあっても、助詞はどれを使うべきか、ここはシカを使うべきかダケを使うべきかと意識しながら話す日本語母語話者はほとんどいないであろう。

一方、統語的な処理を自動的にできない学習者の場合には、話す内容に加えて統語的な処理も意識的に行うよりほかない。しかし、一時的な記憶の保持と処理を行う人間の作動記憶の処理容量には限界があるため、意識的に処理できる情報量には限界がある。そして、この情報処理の限界のため、文法テストや書く時には使えた統語規則の知識が、話す時にも使えるとは限らないのである。つまり、話せるようになるためには自動的な処理ができるようになることが必要不可欠である。このように自動処理が発達していくことについては、習熟度による脳の活性化の違いとして脳機能イメージングを用いた研究で確認されてきている (大石 2006, Sakai 2006, Tatsuno & Sakai 2005)。

Processability Theory は、Levelt (1989) の発話モデルに基づくと、言語の上位階層の処理にはその下の階層の処理情報が必要不可欠なことから、語→句→文→複文の順で下位の階層のものから順に処理の自動化が発達していくと説明する。そして、学習者の処理可能な形態素は学習者の位置する発達段階により制約を受けるとし、表 1 に示す発達段階を提示している。

表 1 英語の言語処理の階層と発達段階(Pienemann 2011 をもとに作成)

段階	process procedure (言語処理過程)	情報の交換	文構造と形態素
1	word/lemma access	語アクセス 情報交換ナン	語彙や決り文句だけの発話
2	category procedure (語彙・範疇処理)	典型的な語順 情報交換ナン	基本語順(SVO) 語彙的形態素使用： 過去-ed、進行-ing、複数-s(dogs) 所有代名詞
3	phrasal procedure (名詞句処理)	名詞句内の 情報交換	名詞句内で情報処理が行われる 複数の-s(many dogs) 文副詞句前置(Then man sit on char.), 疑問詞前置(Why man sit on char.) Do 前置(Do man sit on char?)
4	VP-procedure (動詞句処理)	動詞句内の 情報交換	Yes/No 疑問文倒置(Will she return?) コピュラ文倒置(Is he at home?)
5	the S-procedure (文処理)	主述句間の 情報交換	三人称単数の-s (Peter likes Mary.) WH 疑問文で do や助動詞を 2 番目の 位置に置けるようになる(Why does he like dogs?) (When will she return?)
6	the subordinate clause procedure (従節処理)	節間の 情報交換	間接疑問文での語順の非倒置(I asked when he could come home.) 付加疑問文

※ Pienemann (2011) では下から上へと行くように発達段階が配列されているが、本稿では、他の表との統一を図り、上から下へいう順序で配列しなおした。

2.2 日本語習得研究への応用

Processability Theory を理論的な枠組みとして援用し、日本語の習得過程を調べた研究に峯 (2007) がある⁽²⁾。峯 (2007) は、南 (1993) の示す日本語の階層構造をもとに、情報処理の観点から各従属節⁽³⁾の使用に必要な言語処理の階層を判断し、分析を行っている。

ここで、峯 (2007) の従属節の言語処理の階層の認定方法について簡単に説明する。図 1 は、南 (1993) の分類に基づく A 類、B 類、C 類それぞれの従属節と、主節との係り受けの関係を示したものである。A 類の従属

節は主格を主節と共有し、主節の動詞句を修飾する。つまり、動詞句の階層の処理で使用される従属節である。次に、B類の従属節は、主節とは異なる主格をもつことができるが、主題や視点設定、主節のモダリティに制約がある。例えば、図1のB類の例文のト従属節の場合、文末モダリティを(3)のような依頼文にしてしまうと、非文になってしまう。

(3) * 郵便配達員が来ると、花子がおもてに出てください。

このように、B類の従属節は、従属節と主節二つの節の間での情報処理、つまり、複文処理を必要とする従属節ということになる。最後に、C類は、従属度が低く、後続の主節とは意味的な関係でつながっている。C類従属節と主節との間での統語情報の処理はほとんど必要なく、独立文と差がない。つまり、文の階層の処理ができれば使用可能な従属節であると考えられる。これを Processability Theory で示される発達段階にあてはめると、A類(句) → C類(文) → B類(複文)の順に自動化が進むとの予測がたつ。

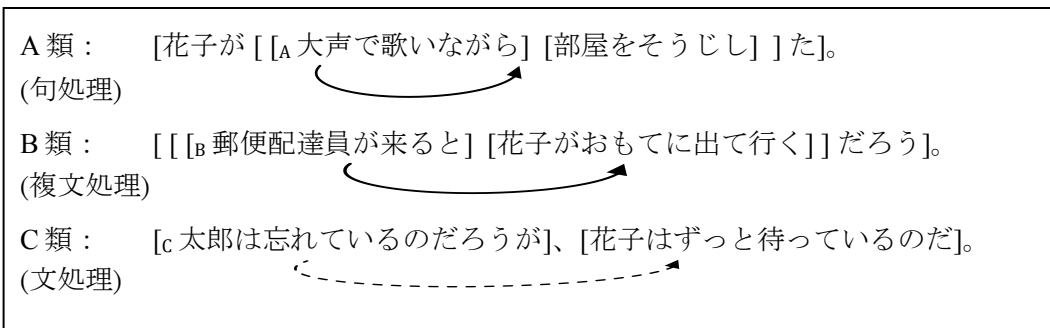


図1 従属節と係り受けの関係 (峯 2007)

この予測のもと、峯(2007)は学習者90名分の発話コーパス(KYコーパス:本稿4節参照)を分析し、「テ(A) → カラ(C) → ケド(C) → タラ(B) → シ(C) → ノデ(B)・ト(B) → テモ(B)」という順に生産的な使用が始まるという傾向を Implicational Scale を用いて示した。この結果から、処理の階層が低いA類の従属節から使用が始まり、処理の階層の高いB類の従属節は使用が後れる傾向にあることがわかる。なかに

は、シ (C) のように、発達段階で予測した時期よりも出現が遅いものも存在するが、これについて峯 (2007) は、学習者は言語処理の負荷を考えて言語形式を選ぶのではなく、自分の発話意図に必要な言語形式を使用するためとし、当該接続辞を使用するための認知的な負荷や、One to One Principle (Anderson 1984) で説明されるような他の既習言語形式の影響等を挙げて、考察している。さらに、接続辞の正用率も調べ、A 類→C 類→B 類の順で 90%を超えることを確認した上で、Processability Theory の妥当性を否定する結果は得られなかったとしている。

3. ダケとシカの使い分けについて

3.1 ダケとシカの機能的な違い

まず、先行研究の述べられているダケとシカの機能的な違いを次に示す (寺村 1991、沼田 2000, 2009、澤田 2007、日本語文法研究会 2009 参照)。

①ダケは述語の制限がないが、シカは否定の述語とのみ共起する。

②ダケはとりたてたもののみに限定の意を付与するのに対し、シカは、とりたてたものに限定するだけでなく、同時に、とりたてたもの以外のものを否定する。そのため、シカは、話者や聞き手の期待や予測 (以下、「想定」と呼ぶ) を満たせないことを表示するのに用いられる。たとえば、次の (4) の A の質問に対する B の答えとしては、A が期待するアイスコーヒーを否定しなければならないため、ホットだけに言及する b の答えは不自然である。一方、ダケシカを使った (5) の答えは自然なことから、(4) b はダケを使用した誤用ではなく、シカを使っていない誤用と考えるべきであろう。

(4) A : アイスコーヒーはありますか。

B : a. すみません。ホットしかおいてないんです。

b. ?すみません。ホットだけおいているんです。

(澤田 2007 : 96 (2))

(5) B : すみません。コーヒーだけしかおいてないんです。

③数量につく場合は、ダケは「少ないが、この数量のみである」ことを表すのに対し、シカは想定を満たしていないことを表す場合に用いられる。ゆえに、次の(6)のように想定を満たしていないことを表示する必要がない場合にはシカを使うと不自然になってしまう。そして、ダケもシカもつかない(7)の答えが自然なことから、(6) b はダケを使用していない誤用ではなく、シカを使ってしまった誤用と考えるべきである。

(6) A : ねえ、いつまで待てばいいの。

B : a. あと1年だけ待ってくれ。

b. ?あと1年しか待ってくれるな。 (澤田 2007 : 96 (3))

(7) B : あと1年待ってくれ。

④副詞的成分につく場合、「少しだけ」や「一度だけ」のように、少ない成分の場合はダケでとりたてることができるが、様態や結果に限定を加える副詞的成分の場合はダケでとりたてることはほとんどなく、次の(9)のように、シカでとりたてる方が自然である(日本語文法研究会 2009)。

(8) {大ざっぱに／ざっと} だけ点検した。(日本語文法研究会 2009 : 49)

(9) 腰痛のため、{?ゆっくりとだけ歩くことができる／ゆっくりとしか歩くことができない}。(日本語文法研究会 2009 : 49)

以上をまとめると、ダケは少ない／小さなものをとりたてて限定の意味を付与するのに対し、シカは否定形式と共起し、とりたてたもの以外を否定することにより、とりたてたものに限定する形式と言えよう。

4. 研究方法

4.1 データ

本研究では、ACTFL-OPI の手法で行われたインタビューを書き起こした次の二つのデータベースを分析した。

- ① KY コーパス⁽⁵⁾：中国、韓国、英語母語話者各 30 名（初級 5 名、中級 10 名、上級 10 名、超級 5 名）、計 90 名のデータが所収されている。
- ② 日本語学習者データベース（国立国語研究所）：母語⁽⁶⁾は統制されていないが、初級 32 名、中級 188 名、上級 110 名、超級 9 名、計 339 名のデータが所収されている。

また、母語話者の使用については、同じ ACTFL-OPI の手法で収集された上村コーパス⁽⁷⁾に所収されている母語話者 40 名のデータで確認した。

4.1 分析方法

分析は次のような手順で行った。

- ① 上村コーパスを分析し、日本語母語話者のダケとシカの使用、使用者数の割合を調べる。
- ② 学習者のデータから分析対象とする使用を抽出する。KY コーパスのデータについては 90 名のデータで、ダケとシカの使用と非用⁽⁸⁾を調べた。国立国語研究所の学習者データベースについては、ダケとシカで検索をかけ、前後の文を含めて抽出した。ただし、「少しだけ、少しだけ」と繰り返した 2 回目以降のもの、インタビューアーの発言を繰り返したもの、慣用的表現（どれだけ、できるだけ）は分析対象外した。
- ③ ダケとシカの使用および使用者数をレベル別に集計し、その推移を見る。
- ④ 峯（2007）に示されている接続辞の使用分布と比較し、言語処理の観点からダケとシカの習得の過程をとらえる。

5. 分析結果と考察

表 1 は、今回の分析に使用したダケおよびシカの使用数である。以下、二つの課題について、順に考察していく。5.1 では、初級から超級へと、学習者のダケとシカがどのように発達していくかについてみていく。そして、これを踏まえ、5.2 では、ダケとシカの使用の発達を、接続辞の使用と照らし合わせ、日本語の全体的な発達の段階に位置づけることを試みる。

以下に挙げる使用例はデータから抽出したものであり、最初の文字がインタビュアー (T) か学習者 (S) の発話かを示す。また、本稿での考

表 1 各コーパスから抽出した分析対象数

コーパス名	だけ	しか	だけしか	非用*	計
KY コーパス(n=90)	196	43	2	4	245
日本語学習者データベース(n=339)	1068	165	2	-	1235
計	1264	208	4	4	1480

※ ダケ、シカどちらも使われていないが、文脈上、どちらかの使用が必要と思われる次のような文を「非用」に分類した。学習者データベースについては、ダケ/シカで検索をかけて分析したため、ダケ/シカの使用されていない箇所の「非用」については確認していない。

(例) 日本の、今少しわかりますから (⇒日本語は、今少ししかわかりませんか、)、夜は、テレビ見ないです【中級下 中国語 CIL01】

察対象箇所には筆者が下線を引いた。紙幅の都合により、下線部以外については文意を損なわない程度に適宜削除した。【 】の中に学習者の OPI 判定の日本語能力のレベル、母語、ファイル名を示す。「国」がつくファイル名は国立国語研究所の日本語学習者データベース、つかないものは KY コーパスのデータであることを示す。

5.1 ダケとシカの使用の変化

5.1.1 ダケ

次頁の図 2 は、日本語のレベル別に集計したダケおよびシカの使用数者の割合を示したものである。図中の直線と破線はそれぞれ母語話者

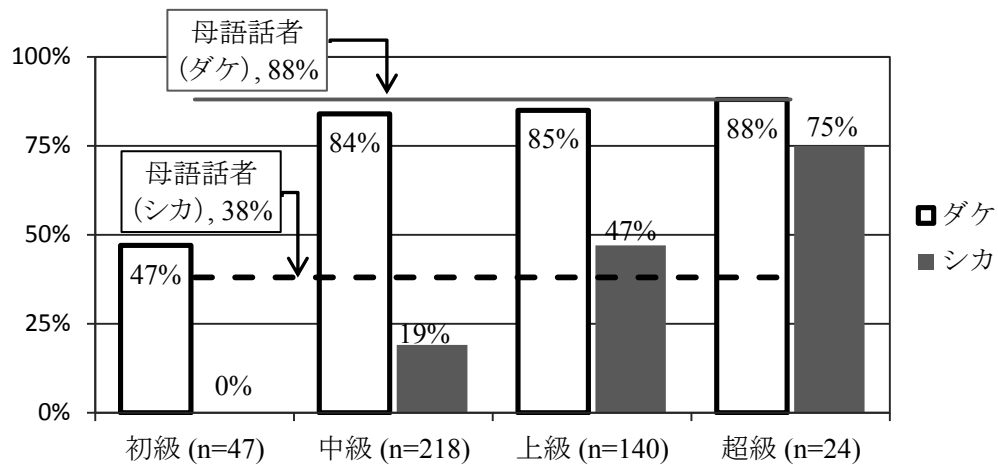


図 2 日本語のレベル別ダケとシカの使用人数の割合

※ 図中の直線と破線はそれぞれ母語話者のダケ、シカの使用人数の割合を示す。

($n=40$) のダケ、シカの使用人数の割合を示す。この図 2 から、ダケは初級から使用が始まり、中級になると、母語話者とほぼ同じ 8 割以上の学習者が使用していることがわかる。

ダケは初級から使用が見られるが、初級では、ダケの前につく語形の処理がうまくできず、次の (14) のようにマス・デスにつくダケも見られた。

(14) (趣味について)

S: お散歩しますだけ 〈あーそう〉、でそれ、とも一寝ます {笑} はい

【初級上 インドネシア語 国-333】

次頁の表 2 はダケがとりたてている要素を、語、句、節に分類し、日本語のレベル別にそれぞれが使用に占める割合を調べたものである。この表から、初級では「肉だけ」や「少しだけ」「1 回だけ」といった 1 語をとりたてたものが約 85%を占めているが、日本語のレベルが上がると、語から句、句から節へと、より大きな言語単位の情報をとりたてられるようになっていくことがわかる。そして、この中には少数であるが動詞をとりたてたものも含まれていた。初級の場合は、(15) のように補語の無い動詞のみをとりたてたものであったのが、中級になると (16) のように補語

表2 言語単位で分類したダケによってとりたてられた要素の割合

日本語 レベル ^{※1}	とりたてた要素 ^{※2}				計
	語	名詞句	動詞句	節	
初級 (n=47)	84.62% (66)	15.38% (12)	0.00% (0)	0.00% (0)	100.00% (78)
中級 (n=218)	78.33% (517)	15.76% (104)	5.15% (34)	0.76% (5)	100.00% (660)
上級 (n=140)	73.99% (330)	15.92% (71)	5.83% (26)	4.26% (19)	100.00% (446)
超級 (n=24)	58.75% (47)	21.25% (17)	13.75% (11)	6.25% (5)	100.00% (80)

※1. n は分析した当該レベルの学習者数を示す。

※2. () の中の数値は出現数を示す。

とりたてた要素は次のような基準で分類した。

語：内容語 1 語。「動詞+ます/ました」もここに含めた。

名詞句：連体修飾+名詞

- 動詞句を含む連体修飾の場合は、動詞句に分類した（例、学校で習うこと）

動詞句：連用修飾+動詞（ガ格を含む場合は「節」に分類した）

- 形容詞述語（ちょっと辛い）もここに含めた（出現レベルと数：中級 1）。
- 「名詞句+格助詞+だけ」も格助詞と動詞との間に情報交換があるとみなし、ここに含めた（出現レベルと数：中級 2、上級 1、超級 1）

節：主語（ガ格）を含む文

を含む動詞句をとりたてるダケの使用が見られるようになり、上級、超級になると（17）のようにガ格を含む節をとりたてるダケの使用も見られた。

(15) (パリを旅行したときに泊ったホテルについて)

T: んー 〈んー〉、トイレありますよね

S: あります

T: なんか、ほかに、ありませんでしたか

S: ほかは、んーない {笑} でも、休むだけ、のはじゅうぶんです

【初級上 中国語 国-378】

(16) (お正月は外で遊んだりしないのかと言う質問に)

S: 外はあんまり、出ない

T: あそ、遊ばない〈はい〉、んーんーんー

S: 家にいるだけで、おもしろいから

【中級中 韓国語 国-220】

(17) (韓国では地方独特の伝統的な音楽をポップスに混ぜたりしないのかという質問に対して)

S: そういのがなんか〈ん〉、ないって思ったんですよ〈ん〉もうある自分が興味がなくて見てないだけかもしれないんですけど

【上級下 韓国語 国-123】

その他、ダケの誤用に関しては、初級から中級学習者には、(18)のように格助詞「で」が脱落したために全く異なる意味になってしまっている誤用や、(19)、(20)のように「時々だけ」という不自然な使用が見られたが、上級および超級学習者にはこのような使用は見られなくなる。これは習得が進むにつれて、次第に不適切な表現が淘汰されていくためと思われる。

(18) S: 東京〈ん〉とても安全だと思います、だいじょうぶ、町に、私は一人〈はい〉、だけ住んでいます (正: 一人だけで住んでいます)

【初級中 ロシア語 国-150】

(19) (Sの仕事は忙しくて寝る時間もあまり取れないという話の流れで)

S: 寝ますは1時間まで {笑} 1時間だけ {笑}、でもときどきだけ

T: あー大変ですねー

【初級上 インドネシア語 国-333】

(20) (自分で料理を作るかという話題で)

S: 勉強することが忙しいですから〈はい〉、ときどきだけ、あー毎月たぶん、1度、だけ作ります。

【中級中 ベトナム語 国-347】

5.12 シカ

次に、シカの使用についてみていく。シカの使用は初級学習者には全く見られず、中級から使用が始まる。しかし、中級学習者にも、(21)のように使用すべき文脈があるにもかかわらず使用できていない誤用や、(22)のように、シカは使っているが述部が否定形になっていない誤用が見られる。

(21) T: テレビ見ないんですか

S: うーんはい、日本語、今一、少しわかりまっすから、夜は、テレビ、見ないーです (正: 少ししかわかりませんから)

【中級下 中国語 CIL01】

(22) S: 今、英語、しか、えー教えます 【中級下 英語 国-149】

また、(23)のように、シカを使って「2 つしかありません」と想定よりも少ない数であることを示す、あるいは、「2 つあるだけです/2 つだけだ」とダケを述部に持っていき、それ以上はないことを示すべき誤用も見られた。

(23) S: (電車の路線が) 日本ではいろいろありますけど、韓国では 2 つだけあります。 【中級中 韓語 国-74】

図 2 からわかるように、上級になると、学習者のシカの使用者の割合は、母語話者の使用者の割合を超え、超級学習者にいたっては母語話者の約 1.5 倍の割合でシカが使用されている。これは、動詞につくダケの使用が学習者には少ないという中西 (2010) の指摘と関連しているように思われる。

述部にダケが来る場合、シカ同様、不足を表し得る (沼田 2009) ⁽⁹⁾。

(23) のような文の場合、母語話者は「2 つあるだけです/2 つだけです」とダケを使用するのに対し、超級学習者はシカで表現するようになる傾向が強いのではないだろうか。つまり、母語話者がよく使うような「～だけだ」の習得はシカよりもさらに習得が後れるのではないかと推察される。

しかし、これについては今後の課題とし、稿を改めて検討することとした。
い。

5.2 ダケ・シカと接続辞の発達段階

次に、ダケとシカの使用を、峯（2007）に示される接続辞の使用と比較し、これらの表現の使用を、同じ言語処理の階層で示される発達段階でとらえることが可能かどうか検討する。

表3 ダケ・シカと接続辞の使用者分布

		とりたて		接続辞							
表現		ダケ	シカ	テ	カラ	ケド	タラ	シ	ノデ	ト	テモ
処理階層		語	複文	句	文	文	複文	文	複文	複文	複文
日本語のレベル	初下 (<i>I</i> =4)			1							
	初中 (<i>I</i> =5)	3		2	1	1					
	初上 (<i>I</i> =6)	3		5	2	1			1		
	中下 (<i>I</i> =9)	8	1	9	6	5	2	2	1		
	中中 (<i>I</i> =14)	12	2	14	13	13	11	7	4	5	2
	中上 (<i>I</i> =7)	7	2*	7	6	7	6	5	4	1	4

※ 上記の数値は各レベルに何名使用者がいたかを示す。中上のシカ使用者は「ダケシカ」の使用者のみの2名であった。

※ レベルの低いほうから二人目の属するレベルを、当該表現の使用が開始したレベルとし、太線で囲んだ。一人目は特異なケースがあると考え、二人目とした。

表3は、ダケ・シカと接続辞の使用者の分布を並べたものである。峯（2007）のデータと比較するために、峯（2007）と同じKYコーパスのデータに絞って表を作成した。そして、各表現の使用者のうち日本語のレベルの低い方から二人目の属するレベルを、当該表現の使用が開始するレベルとして太線で囲んだ（一人目は特異なケースがあるため、外した）。

この表 3 から、語彙・範疇処理としたダケは句処理のテとほぼ同時期に使用が始まることがわかる。次に、複文・文脈処理で使用されるとしたシカと、複文処理とした B 類接続辞の使用者の分布を比較してみると、ほぼ同時期に使用が始まると言えそうである。付録 1 に示す主要初級教科書をみると、教授順序の影響も少しはあると思われるが、表 3 に見られる順序を決定づけるものとは言えないように思われる。

そして、このダケとシカの使用開始順序は、母語習得を調べた大久保 (1967: 84-87) の記録とも一致する。ダケは 1 歳 11 ヶ月で使用されたのに対し、シカは 3 歳 1 ヶ月で次の (24) のようなキャの使用が観察されたあと、6 歳まで採集できなかつたと述べられている (p.99)。

(24) クジニ イッタノ。ヤチヨ ヒトツキャ アタラナカッタ。(3:1)

(大久保 1967: 99, 下線筆者)

6. まとめと今後の課題

本研究では、①とりたて詞ダケとシカの使用の発達の過程をとらえること、そして、②それを接続辞の使用の発達と照らし合わせ、日本語の全体的な発達の中に位置づけること、この二つを目的として行った。

まず、初級から超級学習者、計 429 名の発話データを分析した結果、次の 3 つの傾向が示された。

- ①ダケは初級から使用される。
- ②シカはダケに後れて、中級から使用される。
- ③ダケでとりたてられているものを見てみると、初級から超級へと日本語の能力が上がるにしたがい、1 語のみから、句、節と、大きな言語単位のものを取りたてるダケの使用が見られるようになる。

さらに、本研究では、ダケとシカの習得を Processability Theory (Pienemann 1998) の枠組みでとらえ、接続辞の習得を調べた峯 (2007) の結果と照らし合わせて、日本語全体の発達段階について検討した。分析

の結果、語彙・範疇処理で使用されるとしたダケは、句処理の階層の A 類接続辞とほぼ同時期に使用が開始する。一方、複文・文脈処理で使用されるとしたシカは、ダケに後れて使用が始まり、その開始時期は複文処理の階層の B 類の接続辞とほぼ同時期であることが確認された。

ダケとシカの使用開始順序は、母語習得研究で報告されているものと一致し、習得過程の普遍性を示唆するものと考えられる。さらに、ダケ・シカと接続辞の習得過程を照らし合わせた結果は、言語処理の階層をもとに第二言語の発達の過程をとらえる *Processability Theory* の妥当性を示唆していると言えよう。

最後に、本研究では、学習者の母語の影響についての分析が欠けている。また、超級学習者が母語話者よりもシカの使用が多くなる傾向にあることも示されたが、これについても詳しく見ていくことが必要である。これらについては、今後の課題とし、稿を改めて検討することとしたい。

注

1. ダケ、シカ以外にも「限定」を表すとりたて詞にはバカリがある。しかし、今回分析の対象とした学習者データと同様の手法で収集された母語話者のデータで確認したところ、母語話者の使用も非常に少なかったことから、今回扱ったデータでバカリの習得をみることは不可能と判断し、分析対象から除外した。
2. *Processability Theory* を理論的な枠組みとして日本語の習得をみた研究として、Kawaguchi (2000, 2005, 2009) の一連の研究があり、助動詞や接続辞、そして、受身の習得についての研究がなされている。Kawaguchi は日本語を非階層構造言語として分析しており、処理階層の認定が峯 (2007) とは異なる。
3. 南(1993)では A~C 類全てを「従属句」と呼んでいるが、本稿では「従属節」と呼ぶ。
4. ダケは、二、カラ、場所を表すデ、トの格成分をとりたてる場合は格助詞の前にも後ろにもつくことができる。この場合は意味にも変わりはないが、手段・方法や材料を表すデ格、範囲を表すデ格の場合は、ダケは格助詞デの前にくるのが自然である (日本語記述文法研究会 2009)。
5. KY コーパスの概要及び入手方法については、次のサイトを参照されたい。
http://opi.jp/shiryo/ky_corp.html
6. 学習者の母語については統制されていないが、韓国語、中国語、英語がそれぞれ全体の 53%、17%、8%を占める。詳細、及び、入手方法については、国立国語研究所の次のサイトを参照されたい。

<http://dbms.ninjal.ac.jp/nknet/ndata/opi/000244.html>

7. データの詳細、及び、データの入手については、次のサイトを参照されたい。
<http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus/>
8. 非用については、KY コーパス 90 名のデータで確認した。
9. この場合のダケも、単に少ないということ表現するのみで、シカと全く同じというわけではない。想定する値より少ないことを表す場合には、次の例に見られるように、シカで表すのが普通である。
例) A: 昨日言ったように、ちゃんと鉛筆を 3 本持ってきましたか。
B: すみません。1 本しか持ってきていません。
/? 1 本持ってきただけです。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 市川保子 (1997) 『日本語誤用例文小辞典』凡人社
- 大石晴美 (2006) 『脳科学からの第二言語習得論—英語学習と教授法開発』昭和堂
- 大久保愛 (1967) 『幼児言語の発達』東京堂出版
- 澤田美恵子 (2007) 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 中西久美子 (2010) 「日本語学習者・日本語母語話者のとりたて助詞の使用実態」『計量国語学』27(7), 270-282.
- 日本語記述文法研究会 (2009) 「第 9 部 とりたて」日本語記述文法研究会 (編) 『現代日本語文法 5』くろしお出版
- 沼田善子 (2000) 「とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子著『時・否定と取立て』151-216 岩波書店.
- 沼田善子 (2009) 「現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房.
- 野田尚史 (1995) 「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志・野田尚史・沼田善子編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版 1-35.

- 野田尚史 (2007) 「日本語非母語話者の日本語とりたて助詞の不使用」中西久実子 (編) 『主題・とりたてに関する非母語話者と母語話者の言語運用能力の対照研究』 (平成 15 年度～18 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)研究報告書) , 53-70.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
- 峯布由紀 (2007) 「認知的な側面からみた第二言語の発達過程について—学習者の使用する接続辞表現の分析結果をもとに」『日本語教育』 134, 90-99.
- Andersen, Roger W. (1984). The one to one principle of interlanguage construction. *Language Learning*, 34(4), 77-95.
- Kawaguchi, Satomi. (2000). Acquisition of Japanese verbal morphology: Applying Processability Theory to Japanese. *Studia Linguistica*, 54, 238-248.
- Kawaguchi, Satomi. (2005). Processability Theory and Japanese as a second language. *Journal of Acquisition of Japanese as a second language*, 8, 83-114.
- Kawaguchi, Satomi. (2009). Acquiring causative constructions in Japanese as a second language. *The Journal of Japanese Studies*, 29 (2), 273-291.
- Levelt, W. J. W. (1989). *Speaking: From intention to articulation*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Nation, Paul. (2000). Learning vocabulary in lexical sets: Dangers and guidelines. *TESOL Journal*, 9(2), 6-10
- Pienemann, Manfred. (1998). *Language processing and second language development: Processability Theory*. Amsterdam: John Benjamins.
- Pienemann, Manfred. (2011). Explaining developmental schedules. In M. Pienemann & J. Keßler (eds.) *Studying Processability Theory*, 50-63. Amsterdam: John Benjamins.
- Sakai, Kuniyoshi L. (2005). Language acquisition and brain development. *Science* 310, 815-819.
- Tatsuno, Yoshinori. & Sakai, Kuniyoshi L. (2005). Language-related activations in the left prefrontal regions are differentially modulated by age, proficiency, and task demands. *The Journal of Neuroscience*. 25, 1637-1644.

付録 1

主要初級教科書でのダケ・シカおよび接続辞の取り扱い課（庵他 2000：404-420より）

教科書※ ¹	ダケ・シカ		接続辞※ ²							
	ダケ	シカ	テ	カラ	ケド	タラ	シ	ノデ	ト	テモ
①	11	27	16	9	20	25	28	39	23	25
②	13	14	4	10	-	19	17	17	18	18
③	27	5	6	27	34	32	22	27	26	32
④	7	28	7	13	25	31	13	14	12	26
⑤	6	15	7	10	26	16	18	17	19	21

※1. 各番号の教科書は以下の通り。

- ①新日本語の基礎 I・II：スリーエーネットワーク編著 スリーエーネットワーク
- ②みんなの日本語 I・II：（財）海外技術者研修会編 スリーエーネットワーク
- ③進学する人のための日本語初級：国際学友会日本語学校編 国際学友会日本語学校
- ④日本語初歩：国際交流基金日本語国際センター編 凡人社
- ⑤新文化初級：文化外国語専門学校編 凡人社
- ⑥初級日本語：東京外国語大学留学生日本語教育センター編 凡人社

※2. 用法別に記載されていたものについては、初出の課の番号を記す。